

●グローバル化時代の医療・検査事情 40

世界の医学部を巡って (17)
IV 北米編 アメリカ合衆国 (2)

な ら のぶ お
 奈 良 信 雄
 Nobuo NARA

2. フィラデルフィア

アメリカ独立記念の都市フィラデルフィアには、かれこれ6回訪れた。最初に訪れたのは、同時多発テロの翌年2002年夏、アメリカ臨床化学会 (American Association for Clinical Chemistry: AACC) に参加したときだ。AACCは国際会議場で賑々しく開催され、各国の参加者と意見を交換することができた。当時の日本臨床検査自動化振興会も展示ブースを設けて出展し、日本の検査機器、試薬を各国に紹介した。

当地の医学部としては、トーマス・ジェファーソン大学を訪問した。

②トーマス・ジェファーソン大学

アメリカの大学を訪れるたび、日本との違いに驚くことは少なくない。その一つが門扉や塀がないことだ。

東大、京大、そして僕の母校の東京医科歯科大学など、本邦の大学の多くはキャンパスが門扉と塀で囲われている。これは学問の府としての自由、自律性を確保することであろう。その反面、大学は社会と隔絶されて巷の常識を知らない、などとの揶揄につながっているかもしれない。

それに比べ、自由を尊ぶアメリカの大学にはキャンパスをグルリと囲む門扉や塀なぞない (僕が訪れた大学のことだけなので、間違っていたらご容赦願いたい)。その最たるものの一つがトーマス・ジェファーソン大学 (Thomas Jefferson University: TJU) だろう。

初めてTJUを訪問した折、フィラデルフィア市内

のビルが建ち並ぶ町中で、日本の感覚で大学らしき施設を探したものの、威風堂々とした大学らしき門扉がまったく見つからない。住所を頼りにやっとこさたどり着いたのが医学部らしきビルだった (写真1)。後で調べると、付近には大学病院、研究所、医学部教育施設などが点在している。物理的だけでなく、意識の上でも大学と市民の間に垣根がないのだろう。(因みに、僕が現在所属する順天堂大学医学部にも門扉と塀がなく、病院、研究室、事務局などが本郷付近に点在している。僕の研究室にしても、交通の往来が激しい通りに面したビルの4階にあり、アメリカのような都市型大学の趣きだ)。

さて、TJUはペンシルベニア州フィラデルフィアのセンターシティにある私立大学である。Sidney Kimmel Medical College、College of Health Professions、College of Life Sciences、College of Nursing、College of Pharmacy、College of Population Health、College of Rehabilitation Sciencesな



写真1 トーマス・ジェファーソン大学
 (Bluemlle Life Sciences Building, Sidney Kimmel Cancer Center)

どから構成される医療系が中心であるが、College of Architecture & The Built Environment, College of Humanities & Sciences や Kanbar College of Design Engineering & Commerce もある¹⁾。

医学部は1824年に創設され、31,000名を超える卒業生を輩出している。Sidney KimmelがThomas Jefferson大学に1億1000万ドル!!を寄付し、医学部であるJefferson Medical Collegeは、彼の名を冠してSidney Kimmel Medical College (SKMC)と改名されている。有名なThomas Eakinsの『グロス・クリニック』は、同医学部で行われた外科手術を描いており、フィラデルフィア美術館に所蔵されている(写真2)。

SKMCの使命は、「明日の医療、研究をリードする人材の育成」にあり、優秀な医師になるべく毎年10,000人もが入学を希望してくる。応募者に対し、MCAT成績、大学在学中の成績、面接結果などによって、入学者は272名前後に絞られる。

カリキュラムは3相から構成され、4年間で教育

される(図1)。

・第1相(Phase 1) 21か月

医学の基盤形成(Foundations)の期間として、基礎医学と基本的な臨床医学教育が行われる。臨床医学の実践に必要な知識、技能の修得が目的とされ、少人数での症例検討、チーム基盤型学修(Team-

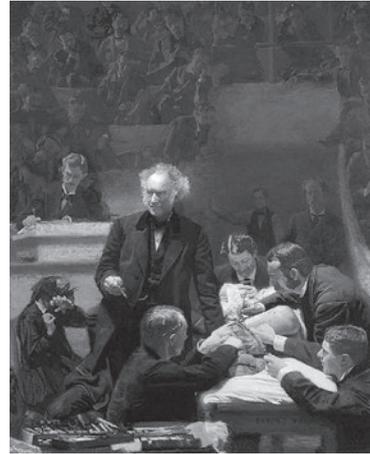


写真2 トマス・エイキンズの『グロス・クリニック』

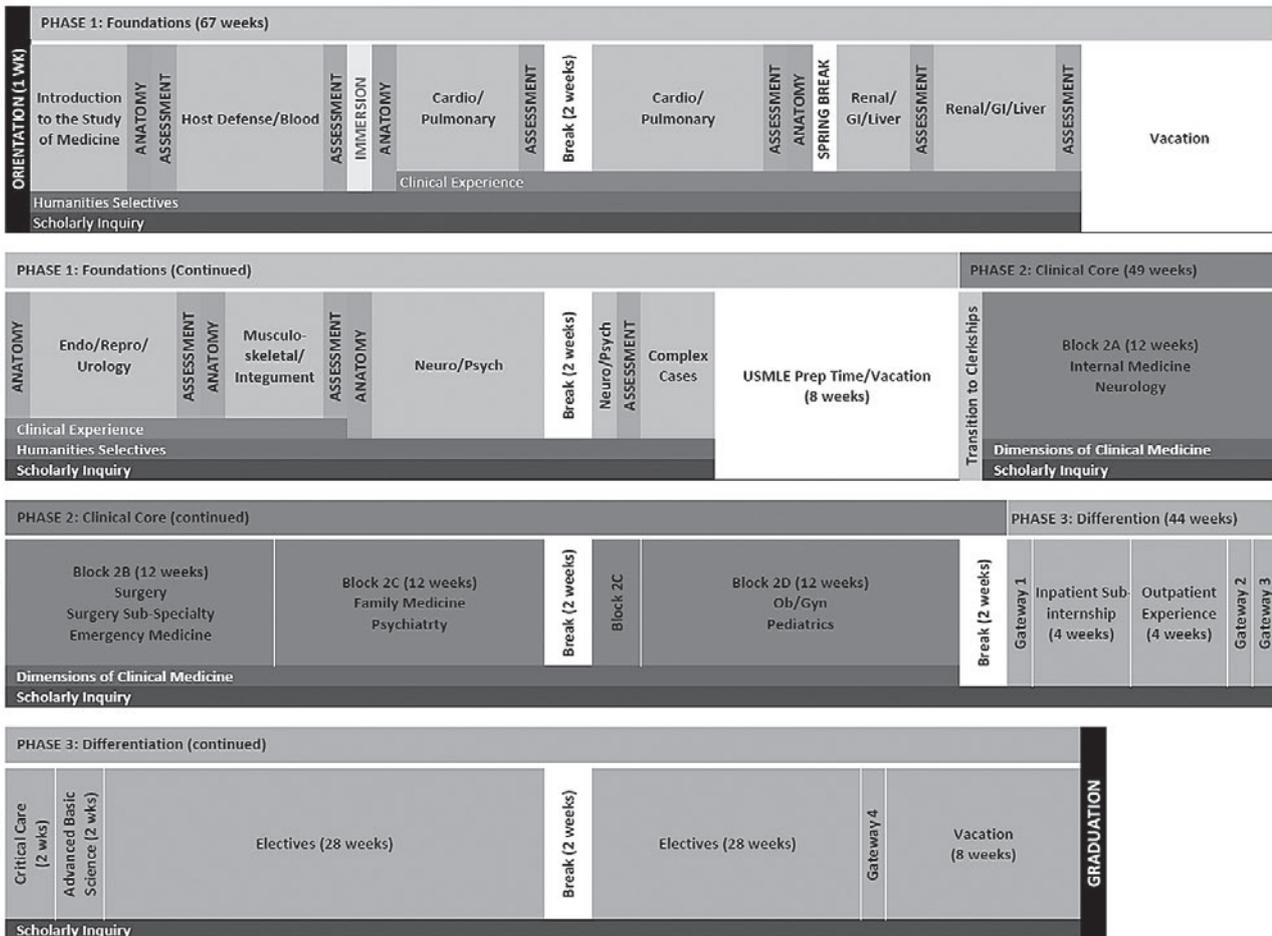


図1 トーマス・ジェファソン大学医学部カリキュラム

based Learning: TBL)、講義、実習などで教育が行われる。能動的学修を推進し、自習期間も設定されて、問題解決能力の涵養などに力点を置いている。第1相の終了後には8週間の自由な期間があり、休暇のほか、研究活動や海外留学などに当てられ、USMLE step 1の準備期間にもなっている。

・第2相 (Phase 2) 12か月

2年次の春から始まるクリニカルクラークシップの期間である。内科、外科、精神科、産婦人科、家庭医療／総合診療など主要な診療科が4つに組まれて、各12週間でローテーションする。臨床実習は、地域の多くの教育病院で行われる。なお、研究活動や人文科学教育も並行して行われる。

・第3相 (Phase 3) 12か月

選択期間で、学生は比較的自由に基礎医学研究、臨床実習など、将来のキャリアに合わせて学修する。USMLE step2の準備にも当てられる。

キャンパスには医学教育に特化した6階建てのDorrance H. Hamilton Buildingがあり、講義室や実習室などがある(写真3)。立派なシミュレーション施設もワンフロアを占め、学生の臨床技能実習に活発に利用されている。ここで面白かったのは、日本でも救命処置や手術室等のシミュレーターは当然だが、患者が退院した後の生活を再現する部屋もあり、ここでは整形外科患者等のシミュレーション施設までもあった(写真4, 5)。整形外科医療を重点の一つに置いている医学部ならではの施設だと思う。

臨床実習は、1825年に創立された大学附属病院などで実施される。大学附属病院は908床を確保し、多くの専門医療をカバーしているが、とくに外傷センターや脊髄外傷センターは地域の中核施設として



写真3 医学教育に特化した
Dorrance H. Hamilton Building

高度の医療を提供している。そのほかの教育病院として、Jefferson Methodist Hospital、Jefferson Torresdale Hospital、Bryn Mawr Hospital、Riddle Memorial Hospital、Physicians Care Surgical Hospital、Rothman Orthopaedic Specialty Hospital、Nemours/Alfred I. duPont Hospital for Children、Shriners Hospital for Children、St. Christopher's Hospital for Childrenなどがある。

臨床実習に入る前には、教員が模擬患者を対象に、しっかりと診察技法を教えている。さらに、心音と心雑音の発生機序に基づいた聴診をシミュレーターを使って実習するなど、優れた臨床医になるための教育が確実に行われている(写真6, 7)。

ところで、SKMCでは、主要な医学部教育のテーマとして“Empathy”を掲げている^{2,3)}。その一環として、僕は2019年3月に、日本におけるProfessionalism教育のあり方について講演を依頼された(写真8)。相撲の「心・技・体」になぞらえて、医師に必要とされる「知・技・心」、小石川診療所の赤ひげ、「解体新書」翻訳に始まる西洋医学への目



写真4 シミュレーション教育センター



写真5 退院後に自宅でのリハビリ訓練を想定した
シミュレーション用部屋



写真6 身体診察実習



写真7 心音、心雑音の発生機序に基づく聴診実習



写真8 トーマス・ジェファーソン大学での講演

覚め、鳴滝塾やポンペなど、日本の医学の歩みなどを紹介した⁴⁾。最後は宮沢賢治の「雨ニモマケズ」で締めくくった。下手くそな英語なので、理解が得られたのかどうか不安だったが、講演直後には質問が殺到し、どうやら講演の内容に満足してもらえたようだ。

さて、医学部視察も講演も終えたことだし、外に出て、フィラデルフィア市内をブラブラ街歩き。

大学闘争が収まりつつあった1970年頃、アメリ

カでの研修を夢見て、クラスの半数ほどの学生が外国医学部卒業生教育委員会 (Educational Commission for Foreign Medical Graduates: ECFMG) の試験を受験していた。現在ではアメリカ以外の医学部を卒業した者は、アメリカ国内医学部卒業生と同じアメリカ医師国家試験 (United States Medical Licensing Examination : USMLE) を受験しなければならないが、当時は ECFMG がアメリカで医師になろうとする外国人医師に対する試験を取り仕切っていた。

今のようなインターネットなどなく、ECFMG とのやりとりは、タイプライターで打ち込んだ書類を封書で郵送したものだ。幾度もタイプしたものだから、3750 Market Street, Philadelphia という住所はいまだに刷り込まれている。

僕が ECFMG を訪問するきっかけになったのは、いわゆる“2023年問題”とか“臨床実習72週問題”とか称される、2010年の ECFMG の一方的な通告だ⁵⁾。2023年からは、国際基準で認定された医学部からの卒業生にしか、アメリカで医師になる資格申請を与えないというものだ。この宣言こそが、僕を日本医学教育評価機構 (Japan Accreditation Council for Medical Education: JACME)⁶⁾ を発足させる任務につかせることになった。なお、COVID-19 感染拡大の中、「2023年という期限は守れないよ」と、僕は ECFMG 会長に直談判し、どうにか2024年への先延ばしすることにこぎ着けた。

ECFMG の通告は、まさしく「泰平の眠りを覚ます」黒船のごとく、文部科学省を始め、日本の医学部教育関係者にとって大変なショックだった。平成の黒船を迎え撃つ(?)べく、僕は時の老中阿部正直よろしく、文科省、全国医学部長病院長会議と協議を重ね、2015年に JACME を発足させた。そして、2017年3月に世界医学教育連盟 (World Federation for Medical Education: WFME)⁷⁾ から国際的に通用する評価機関であるとの認証を受けた。全医学部82校の評価を2024年までには終える計画で、粛々と評価事業を進めている。

ただでさえ、評価を受けることには、人的、経済的、時間的な負担がある。負担の大きな評価事業を進めるためには、“黒船”が来たと言って、医学部関係者を説得した。もっとも、アメリカで2023年問題を提起した ECFMG を黒船 (battle ship) に例

えて話をしても、当のヤッコさんたち、“黒船”なんて知る人なぞ、誰一人としていない。チッポケな国の歴史なんて関心がないのは当然かも。でも“黒船”という表現はインパクトが大きいらしく、その後には彼らと会うと、「黒船来航後の日本の医学教育はどうなった?」と、経緯を聞いてきてくれる。

フィラデルフィア市内のホテルに泊まった僕は、地下鉄を利用してECFMGを訪問しようとした。ところが、フロントで3750 Market Streetに行くといったら、リムジンで送ってやるよと親切の押し売り。渡りに舟とばかり、豪華なリムジンに乗り込むと、運転手は「僕はアイヌ文化を研究しているのだ」と言って、運転そっちのけで日本の歴史や文化の話しに花が咲いた。それを見越してサービスしてくれたのかしら?

ECFMGのすぐ隣には前回紹介したNBMEがある。そして、ECFMGのビルには国際的な医学教育と研究の発展を検討しているFoundation for Advancement of International Medical Education and

Research (FAIMER)もある⁸⁾。つまり、3750 Market Street付近には、世界の医学教育に大きな影響を与える重要な施設が密集しているのだ。フィラデルフィアを訪問した6回のうち3回はECFMG、NBME、FAIMERを訪れ、世界の医学教育のあり方について議論した(大風呂敷?)(写真9, 10)。

フィラデルフィアは医学教育のメッカである以上に、独立記念の都市として名を馳せている。市内にはイギリスからの独立を記念して、リバティ・ベルや、ニコラス・ケイジ主演の映画「ナショナル・トレジャー」のロケ地にもなった独立記念館などがあり、アメリカの歴史に浸れる(写真11, 12)。

ペンシルベニアの建設者ウィリアム・ペンがすくと尖塔に立つ市庁舎は厳かそのもの(写真13)。市庁舎の塔には上れると聞いて、受け付け窓口に駆けつけた。11時頃に行ったところ、14時においでとのこと。ディズニーランドじゃあるまいし、何で3時間も待たされるのか? 怪訝に思ったが、役人には逆らえない。しぶしぶ指示に従ったところ、予定



写真9 Emmanuel Cassimatis ECFMG 会長(当時)



写真11 リバティ・ベル



写真10 FAIMERで John Norcini 代表、Marta van Zanten 博士と



写真12 独立記念館



写真 13 フィラデルフィア市庁舎

時刻に行って疑問は簡単に瓦解した。

古い建物だけに、エレベーターは狭く、定員は7～8名程度。その狭いエレベーターに、エレベーターガールならぬ、僕の4人分はありそうな黒人警備員が同乗していた。2001年の9.11同時多発テロ事件の後でもあり、公共機関の警備は嚴重そのもので、屈強な警備員が配備されているのだろう。大男がエレベーターの大半を占拠しているだけに、エレベーターに乗れる見物客はたったの4名程度。予約に時間がかかるのも宜なるかな!!

エレベーターで屋上に着いたところ、大男は小さな木の椅子にちょこんと座り、見物客に5分ほどの屋上見物を許可した。見物客が市内を観覧した後は再び大男はエレベーター内へ。つまり彼は一日中、エレベーターを昇降するだけで、ほとんどエネルギーを消費していない。アメリカ人が超肥満になる実態を垣間見た感じだった。

市庁舎近くにはLOVEのアート作品があり、ここからフィラデルフィア美術館を遠く望める(写真14, 15)。似たようなアートが東京の新宿西口にもあるが、コピーかな? フィラデルフィア美術館は「ロッキー」の映画で有名だが、ルノワール、マネ、モネ、ゴッホを始め、印象派の絵画が数多く展示され、何度訪れても心が癒やされる。フラッシュさえ焚かなければ写真を撮っても良いのは、とても助かる。

フィラデルフィア市内をブラブラ歩いていると、とあるビルに何だか見かけたような垂れ幕があった。「Now is the time」。どうやら不動産の宣伝らしく、「買うなら、今でしょ!」と言わんばかり(写真16)。後日、TV番組「林修の今でしょ!講座」に出演した折り、林先生に「今でしょ!」はオリジナルじゃ



写真 14 市庁舎近くの「LOVE」のアート作品から美術館を望む



写真 15 フィラデルフィア美術館



写真 16 フィラデルフィア市内で見た「今でしょ!」

ないでしょうと指摘した。彼は初耳だったようで、苦笑い。それ以降、彼はあまりこの言葉を発していないようだが、気のせいかな?

さて、2019年のジェファーソン大学訪問は3泊4日の強行軍だった。フィラデルフィアからシカゴで乗り継いで帰国の途についた。フィラデルフィアからの飛行機で座席に座っていると、隣りに2m 24cm

の大男が乗り込んできた。不覚にも、いや当然だろうが、“どこの誰だか知らなかった”。

ところが、乗り込んでくる乗客が、次々と大男とグータッチをするではないか。極めつけに、子供が駆け寄ってスマホで一緒にピース。こいつあ、ただ者ではあるまい。背丈からしてバスケットボール選手か？ガリバーを取り巻く小人よろしく、おそろおそろ彼に声をかけた。「バスケ選手ですか？」と聞けば、「そうさ、俺のことを知らないのか、Boban Marjanovic だよ」と切り返された。彼はフィラデルフィア・セブンティシクサーズ (Philadelphia 76ers) というチームの看板選手で、当地ではスーパースターとのことだった。

ビジネスクラス席だったが、それでも彼にとって機内は狭い!! アメリカの航空機なので、ゆったり座席に座ると、僕の足は恥ずかしながら床に届かない。が、彼ときたら脚が長すぎ、ギャッジベッドに座るかのごとく、脚を折りたたみ、天井で頭を打たないよう身をかがめるように座っていた。さながら、超巨大なエビだ!! スマホを取り出していじっていたが、野球グローブのような手にかかれば、スマホはマッチ箱サイズ。そんな長身男にとって唯一便利だったのは、頭上の荷物棚に置いた荷物を、立つこともなく、腕を伸ばしてひょいと取れることだった。まるで手長ザルだ。デッカイって、いいな～。

3. ボルチモア

フィラデルフィアで ECFMG を訪問したあと、2015 年にアメリカ医学校協会 (American Association of Medical Colleges: AAMC)⁹⁾ 主催の医学教育学会が開催されるボルチモアに寄った。有名なジョンズ・ホプキンス大学がある都市で、フィラデルフィア駅からは特急電車で向かった。

アメリカでの学会は、基調講演はあるものの、基本的には全員参加のワークショップ形式 (写真 17)。医学部での教育は大講堂での講義スタイルから小人数教育に移行してきているが、学会でも小人数グループでのテーブルディスカッションが主体になっている。いろんな大学の人たちと、率直に意見を交わすことができる。しかも、グループがどんどん変わるものだから、あたかもネズミ講のごとく、知り合いが増える仕組みだ。日本から来た僕にとっては“針のむしろ”状態ではあったが、口角泡を飛



写真 17 アメリカ医学教育学会でのワークショップ

ばず議論からは得るものが多かった。

学会ではもちろんレセプションがある。が、そこはアメリカ。学会主催のレセプションだけでなく、いくつかの組織、団体がそれぞれに晩餐会を開いては交流を深める習わしだ。僕の人柄が為せる業か、Nara という名前が覚えられやすいのか、はたまた腹をすかせた貧乏人として哀れまれるのか、海外の学会に行けば、どこからともなく誘いがかかる。

AAMC にも全米からさまざまな組織が参加しており、Liaison Committee on Medical Education (LCME)¹⁰⁾ と Visiting Student Learning Opportunities (VSLO)¹¹⁾ という 2 つの組織から、同時刻に開催される晩餐会の招待が舞い込んだ。時差ボケもあって、うっかり両グループに Happy to join you ! なんて返事してしまった。きっと学会場の近くだろうと高をくくっていたら、レストランの住所を見てビックリ。学会場をはさんで東西に分かれた、まったく別々の場所だった!! 幸いにも LCME の晩餐会は立食。ワインを飲みつつ愛想を振りまいてから、会長に断り、会場を後にした。急いでタクシーをつかまえ、20 分ほどかけて VSLO の晩餐会場に向かった。こちらは着席のイタリア料理 (写真 18)。すでに参加者はワインで酔いが回っており、僕の遅れたことなんて、誰一人咎めなかったのは幸いだった。

さて、学会の合間を縫って市内見学。ボルチモアは港街だ。湾内には帆船やらヨットが係留され、見物人で賑わう。ニューヨークと同じく貿易センタービルがあり、9.11 同時多発テロの犠牲者慰霊碑もあった。ビルに上って展望席から湾を見下ろすと、気持ちさがさわやかになる (写真 19)。そこから東京までは 6,776 マイルという表示があった。



写真 18 アメリカ医学教育学会の際の
VSLO 招待ディナー



写真 20 ベーブ・ルース博物館



写真 19 貿易センタービルからボルチモア湾を望む



写真 21 ボルチモア名物クラブケーキ

ボルチモアは野球の神様ベーブ・ルースが生まれた都市だ。彼の生家はオリオールズ球場のすぐ近くにある。今では博物館となり、彼が使用したバットやユニホームなどが展示されている (写真 20)。

港街のボルチモアでは魚介が名物。レセプションや歓迎ディナーも良いが、気詰まり感は否めない。折角の御馳走もまるでノドを通らない (その割には、帰国すると体重が常に2~3kg 増えているのは、何でだろう)。そこで、インナーハーバーにあるシーフードレストランで、ゆったりと大西洋のオイスター、シュリンプカクテル、ボルチモア名物のクラブケーキ、そして白ワインとしゃれ込むことに (写真 21)。海外調査研究にはストレスが付きもので、これくらいの役得は大目にみていただきたい。

文 献

- 1) <https://www.jefferson.edu/> アクセス 2021.09.05
- 2) Spandorfer J, Phol C.A., Rattner S.L, Nasca T.J.: Professionalism in Medicine. A Case-based Guide for Medical Students. Cambridge University Press, New York, 2010
- 3) Hojat M: Empathy in Health Professionals Education and Patient Care. Springer International Publishing Switzerland, 2016.
- 4) <https://www.youtube.com/watch?v=T4plOXutBCU> アクセス 2021.09.05
- 5) <https://www.ecfmg.org/accreditation/> アクセス 2021.09.05
- 6) <http://www.jacme.or.jp/> アクセス 2021.09.05
- 7) <https://wfme.org/> アクセス 2021.09.05
- 8) <https://www.faimer.org/> アクセス 2021.09.05
- 9) <https://www.aamc.org/> アクセス 2021.09.05
- 10) <https://lcme.org/> アクセス 2021.09.05
- 11) <https://students-residents.aamc.org/> アクセス 2021.09.05